

動名詞接尾辞「-化」について

王 卓・宋 荣芬

Study on “～化” as a affix of gerund

Wang zhuo and Song rongfen

神戸医療福祉大学紀要 第15巻 第1号

(平成26年12月)

<原著>

動名詞接尾辞「～化」について

王 卓¹⁾・宋 榮芬²⁾

Study on “～化” as a affix of gerund

The original meaning of “化” is change. This article analyzes and compares the gerund with intransitive verb and transitive verb part of speech of “～化”, as a following affix in Japanese. It is believed that when “～化” follows the gerund with intransitive verb part of speech, it has the meaning of “the change because of human behavior” and “the change by nature”. While when it follows the gerund with transitive verb part of speech, it means “the change with/without subjective awareness”. Based on this, the article also compare the function of “～化” and “化” as a following affix in Chinese.

Key words : affix, gerand, influence of human behavior, with subjective awareness, without subjective awareness

接尾詞、動名詞、人為的働き、意図的、非意図的

1 はじめに

「化」は、動名詞接尾辞として、名詞の後ろにつくことにより、その名詞に自他動詞性をつけることができる。つまり、「本格化」「多様化」「映画化」「液化」のような語は、名詞性を持ちながら、前項名詞に「化」のような接尾辞をつけることによって、動詞性もつけられ、「～化する」というサ変自他動詞をつくる。本論文は、動名詞接尾辞の「化」を、自動詞性動名詞接尾辞の「化」や他動詞性動名詞接尾辞の「化」に分けて、「変化」の視点から、自動詞文において用いられる際の「化」の意味や、他動詞文において用いられる際の「化」の意味を検討する。又、中国語における「～化」の動詞の用法と対照し、日中間の相違を明らかにする。

2 先行研究

小林(2004)は、自動詞を基本とするか他動詞を基本とするかには双方向的な変化の仕方があり、それは語の性質に応じて決まると反論し、「～化する」について自他の連続性のスケールを提案した。このスケールは、自動詞用法専用の動詞(例えば、「深刻化する」)と他動詞用法専用の動詞(例えば、「正当化する」)との両極をなし、その間に、自動詞用法を基本とするものと他動詞用法を基本とするものがある。また、自他両用の動詞を自動詞用法優勢(例えば、「本格化する」)から他動詞用法優勢(例えば、「実用化する」)へと連続的に位置づけるのである。

しかし、いわゆる「化」は、根本的に言うならば、「変化」の意を表す。自動詞性動名

1) 東京外国語大学 (Tokyo University of Foreign Studies) 〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

2) 神戸医療福祉大学 (Kobe University of Welfare) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

詞における「化」や他動詞性動名詞における「化」は、「変化」を表す際の意味が異なると思われる。したがって、「化」を「変化」の視点から分けて、自動詞性動名詞接尾辞の「化」は「人為的な働きかけによる変化」か「自然に起こる変化」を、他動詞性動名詞接尾辞の「化」は「意図的な働きかけによる変化」か「非意図的な働きかけによる変化」を表すのか、ということについて、検討する必要がある。

3 接尾辞「化」の意味について

接尾辞の「化」の意味は、田窪（1986）の説に従い、「ある性状・状態に－すること／なること」であり、実質的な意味はほとんどなく、ほぼ状態変化のサ変動詞語幹を形成する接尾辞の機能を果たしていると考えられる。前項はこの変化の結果となるべき状態、性状を表す。この解釈を見るならば、いわゆる「化」は、「変化」の意である。核心的な意味は、「変化」そのものである。したがって、本論文は、小林（2004）を参考として、「化」の原型的語彙概念構造が次のように仮定する。

(1) …[BECOME [y BE AT …]]…

接尾辞の「化」が、名詞に付いて、自他両用の動名詞を構成する。実際は、「化」はそれ自身が自動詞性や他動詞性を備えている。この点は、田窪氏の規定に従い、説明されている。したがって、「化」は、自動詞文において使われる際の意味と他動詞文において使われる際の意味とが、異なると思われる。「化」の意味を検討する際に、自動詞性動名詞接尾辞の「化」や他動詞性動名詞接尾辞の「名詞＋化」に分けて、分析する必要がある。

3.1 自動詞性動名詞接尾辞の「化」

先に自動詞性動名詞接尾辞の「化」を見ていきたい。自動詞文に使われる「化」の表す「変化」が、主に「人為的な働きかけによる変化」や「自然に起こる変化」を含むと思われる。「人為的な働きかけによる変化」を表す場合、小林（2004）に挙げられた例文を引用して、次のようになる。

(2) 主要国による為替市場への協調介入が本格化した。

(2)に使われる「化」は、動作主としての「主要国」からの働きのため、対象物としての「為替市場への協調介入」が「本格化」になるという事象を表す。つまり、「為替市場への協調介入の本格化」という変化を達成しようとする、人為的な働きかけが不可欠である。もう一つの例を挙げる。

(3) 国際競争時代を迎えて、金融機関のサービスが多様化している。

(2)と類似し、(3)は、動作主としての「金融機関」からの働きのため、対象物としての「サービス」が「多様化」になるという事象を表す。「金融機関」からの人為的な働きかけが欠けると、「サービスの多様化」は成立できず、自動的に起こる可能性がないのである。

したがって、自動詞文において、「人為的な働きかけによる変化」を表す「化」の語彙概念構造は、次のように規定していきたい。太字は、明示していない変化要因を示す。

(4) [[**x** ACT ON **y**] CAUSE [BECOME [y BE AT…]]]

一方、「自然に起こる変化」を表す場合、再び小林（2004）に挙げられた例文を引用して、次のようになる。

(5) 行楽シーズンが本格化した。

(5)は、自然環境の変更のため、「行楽シーズン」が「本格化」になるという事象を表す。

人為的な働きかけが欠けても、自然環境の変更に従い、自然に「行楽シーズンの本格化」が起こる可能性もある。もう一つの例を挙げる。

(6)水蒸気が液化した。

(6)も、自然原理のため、「水蒸気」が「液化」になるという事象を表せる。単純的に自然原理に基づくので、(6)の場合、「水蒸気の液化」は人為的な働きかけと関わらないと言え、自然に起こる変化である。

ただし、(5)にしても、(6)にしても、自然に起こる変化であるが、一定的な自然法則に従わなければならない。(5)では、四季の変更という自然法則を満たし、(6)では、気液転換の自然法則を満たした上で得られた変化である。つまり、一切の外因を無視できないと思われる。この点は、小林(2004)の規定と異なる。自動詞文において、「自然に起こる変化」を表す「化」の語彙概念構造は、次のように規定していきたい。また、太字は明示していない変化要因を示す。

(7) [x CAUSE [BECOME [y BE AT…]]]

自動詞性動名詞接尾辞の「化」の意味を図で表現すると、次のようになる。

「化_自」 $\left\{ \begin{array}{l} \text{「人為的働きかけによる変化」: } [[x \\ \text{ACT ON } y] \text{ CAUSE [BECOME} \\ [y \text{ BE AT}\dots]]] \\ \text{「自然に起こる変化」: } [x \text{ CAUSE} \\ [BECOME [y \text{ BE AT}\dots]]] \end{array} \right.$

図1

以上は、「化」が自動詞性動名詞接尾辞とする際の意味を検討した。次は、「化」が他動詞性動名詞接尾辞とする際の意味を検討していきたい。

3.2 他動詞性動名詞接尾辞の「化」

「化」は、「変化」の意を表すので、他動詞性動名詞接尾辞として、他動詞文において用いられる際に、田窪(1986)の規定に従い、「ある性状・状態に-すること」を表す。つまり、動作主の働きかけを経て、対象物の変化がもたらされるという事象である。しかし、動作主の働きかけは、意図的か非意図的か、という問題が存在している。この問題に基づいて、「化」は、他動詞性動名詞接尾辞として用いられる際の意味を検討する必要があると思われる。ここで、「意図的な働きかけ」や「非意図的な働きかけ」に分けて、他動詞文における「化」の意味を検討していきたい。

「化」は、他動詞文において、「意図的な働きかけによる変化を生じさせる」という事象を表す場合、小林(2004)に挙げられた例文を引用して、次のようになる。

(8)主要国が為替市場への協調介入を本格化した。

(8)は、動作主としての「主要国」が「為替市場への協調介入を本格的にしよう」という意図に基づき、意志的に「為替市場への協調介入」に働きかけ、結果として、対象物の「為替市場への協調介入」に「本格化」という変化が生じるという事象を表す。一定的な意図に基づかないと、「主要国」が自然に「為替市場への協調介入を本格的にする」可能性はないといえる。もう一つの例を挙げる。

(9)国際競争時代を迎えて、金融機関がサービスを多様化している。

(9)は、動作主の「金融機関」が「国際競争時代を迎えるために、サービスを多くの様式や種類に分かれる」という意図に基づき、意志的に「サービス」に働きかけ、結果として、対象物の「サービス」に、「多様化」という変化が生じるという事象を表す。(8)と類似し、動作主自身の意図が欠けると、「金融機関」

が自然に「サービスを多様にする」可能性はないと思われる。

したがって、他動詞文において、「意図的な働きかけによる変化を生じさせる」という事象を表す「化」の語彙概念構造は、次のように規定する。

- (10) [x CONTROL [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT …]]]]

一方、「非意図的な働きかけによる変化を生じさせる」という事象を表す場合、例として、次のような用例を挙げる。

- (11) 籾殻の炭化装置『炭麗』は、加熱された窯の中に籾殻などの有機物を通過させることによって、籾殻を炭化する。

(11)において、動作主の「籾殻の炭化装置『炭麗』」は、無生物の機械として、事前に設定された指令に従い、動いている。動作主としての『炭麗』は、無生物なので、籾殻を炭化することは、意志的な動作とは思わない。つまり、「籾殻を炭化する」ことは、動作主の『炭麗』にとって、意図的な働きかけではなく、機械的に非意図的な動作を繰り返し、対象物に働きかけるということである。したがって、「籾殻の炭化」ということは、非意図的な働きかけによって、もたらされた変化である。もう一つを例を挙げる。

- (12) 親水性の強い界面活性剤が、水溶液を油に可溶化する。

(12)において、動作主の「界面活性剤」は、それ自身が水溶液を油に溶け込む能力を持っている。この物理的な特性により、「界面活性剤」は、「水溶液」を「油」に溶け込む。「水溶液を可溶化する」という事象は、動作主の「界面活性剤」が自身の特質によりもたらされる変化であり、「意図的な働きかけによる変化」であるとは言えない。即ち、「非意図的な働きかけによる変化」である。

したがって、「非意図的な働きかけによる変化を生じさせる」という事象を表す「化」の語彙概念構造は、次のように規定する。

- (13) [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT…]]]]

他動詞性動名詞接尾辞の「化」の意味を図で表現すると、次のようになる。

「化 _他 」	}	「意図的な働きかけによる変化を生じさせる」: [x CONTROL [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT…]]]]
		「非意図的な働きかけによる変化を生じさせる」: [[x ACT ON y] CAUSE [BECOME [y BE AT …]]]]

図2

4 中国語における接尾辞の「化」

「化」は中国の古漢語の中において主に「変化」の意味を表す。その後、日本に伝来して、最初、本来の意味を維持して使われていたが、江戸中期から、蘭学者の訳本の中において、造語要素として使われ始めた。その後、明治時代を経て、接尾辞として「～化」は、系統的に定着、発展し、現在、いろんな語彙（漢語、和語、外来語など）に接続できるようになった。

そして、二十世紀初期から、接尾辞としての「～化」は、現代西洋文化、思想、科学技術などを示す和製漢語とともに、中国人留学生を通じて中国に持帰され、新しい中国語として多く使われるようになった。

現在、接尾辞「～化」は現代日中両言語の中で共通性が高いものとして使われている。しかし、形式が類似しているが、造語機能も一緒であるとは限らない。中国語における「～化」の名詞としての用法は、意味範囲の多少

の差を除いて、日本語の用法とほぼ一緒である。それに対して、「～化」の動詞としての用法は、日本語との相違が小さいわけではない。

まずは、言語上の特性の為、中国語において実詞としての一語は「多重役」の現象が数少なくない。すなわち、一つの単語が名詞、動詞、形容詞など、複数の役割を持っている。構文中の語順及び他の語の組み合わせにより、語の役割も変わる。日本語のように、形態的要素から動名詞を判断できるわけではない。

(14) “多样化的服务” = 「多様化のサービス」

(15) “服务多样化” = 「サービスが多様化される／サービスを多様化させる」

“多样化”は、(14)の場合、名詞で“服务”の修飾語とされているが、(15)の場合、述語動詞の機能をしている。

また、中国語の動詞では、日本語における自動詞と他動詞のような明確な区別はない。勿論、有対他動詞と無対他動詞の区別もない。「対象物に働きかけず、動作主本体の動作」としても、「対象物に働きかけて、動作主が何らかの変化を引き起こす」としても、同一の事象を表現するなら、動詞自体が変わらない。変わるのは、構文の語順と付加成分の調整のみである。例えば、有対動詞「閉まる」と「閉める」に対応する中国語は“关”という一つの動詞しかないのである。

(16) 「ドアが閉まる」 = “门要关了”

「ドアが閉まった」 = “门关了”

(17) 「ドアを閉める」 = “要关门了”

「ドアを閉めた」 = “关门了”

ただし、中国語の“漢典”（漢字字典）によれば、「接尾辞“～化”が、“使成为”（ある働きかけで～のようにさせること）、“使变成”（～状態に変えさせること）の意味

を表す」というように解釈されているので、使役の特性も明確している。従って、中国語における動詞としての「～化」は、日本語における自動詞、他動詞のような表現に直接対応しないが、日本語の自動詞の被動態「～化される」と他動詞の使役態「～化させる」の表現に対応している。

本文の3.1と3.2に挙げた日本語自他動詞の例文に中国語の訳文を付け、「～化する」への対応を比較してみよう。

先ず、「人為的な働きかけによる変化」を表わす自動詞の場合、

(2)主要国による為替市場への協調介入が本格化した。

訳文：“由主要发达国家实行的对外汇市场的联合干预进入了正式的阶段。”

(3)国際競争時代を迎えて、金融機関のサービスが多様化している。

訳文：“国际竞争时代的到来，使得金融机关的服务日趋多样化。”

(2)中の「本格化」という語に対し、直接対応する中国語の「～化」の表現がないので、“进入了正式的阶段。”という意識しかない。(3)中の「多様化」は、中国語と日本語が通用であるが、この場で“使”とともに使役構文を構成した。

また、「自然に起こる変化」を表わす自動詞の場合は、以下ようになる。

(5)行楽シーズンが本格化した。

(6)水蒸気が液化した。

訳文：“娱乐季节正式到来了。”

“水蒸气液化了”

(5)は(2)と同じ、“正式到来”が「本格化」に対応している。(6)の「液化」の「化」は接尾辞というより、「化」本来の用法で、変化という動詞の機能を果たしている。

次に、他動詞性動名詞接尾辞の「化」の構

文に対して、対応する中国語はどうかを見てみよう。先ず、「意図的な働きかけ」の場合、

(8)主要国が為替市場への協調介入を本格化した。

訳文：“主要发达国家正式实施对外汇市场的联合干预了。”

(9)国際競争時代を迎えて、金融機関がサービスを多様化している。

訳文：“面对国际竞争时代的到来，金融机构正在让自己的服务日益多样化。”

(8)の訳文では、例(2)、(5)と同じ、“正式実施”で「本格化」に対応し意識している。(9)の訳文は自動詞性の(3)の訳文とほぼ一緒で、使役構文が使われている。ただ使役の主語が変わっただけである。

さらに、無生物主語の「無意図的な働きかけ」の場合を見てみよう。

(11)籾殻の炭化装置『炭麗』は、加熱された窯の中に籾殻などの有機物を通過させることによって、籾殻を炭化する。

訳文：“稻谷壳的炭化装置『炭丽』通过把稻谷壳等有机物送入被加热的窑体流通使其发生炭化。”

(13)親水性の強い界面活性剤が、水溶液を油に可溶化する。

訳文：“亲水性强的界面活性剂可使水溶液溶于油。”

中国語でも無生物が他のものに働きかける構文が作りにくいいため、“把”構文又は迂言的な使役構文のほうが自然である。

上述の通り、日中対応の目線からいうと、文に表されている意味環境、言語対応などに関わるため、日中両言語における動詞性機能を表す接尾辞「～化」は確かに簡単に対応できないのである。語彙を変えるか、構文を変

えるか、翻訳などをする際に、柔軟に操作することが重要ではないかと思われる。細かい対応問題は今後の課題とする。

5 おわりに

以上は、「化」を「変化」の視点から分けて、自動詞性動名詞接尾辞の「化」は「人為的な働きかけによる変化」「自然に起こる変化」、他動詞性動名詞接尾辞の「化」は「意図的な働きかけによる変化」「非意図的な働きかけによる変化」を表すということについて、検討した。分析する過程で、「化」をめぐる、日本語の「～化」動名詞や中国語の「～化」動名詞は、動詞文における異同について検討した。具体的な日中対応問題は今後の課題とする。

参考文献

- 小林英樹 (2004) 『現代日本語の漢語動名詞の研究』 東京：ひつじ書房
 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』 日英語対照研究シリーズ 5. 東京：くろしお出版
 田窪行則 (1986) 「～化」 『日本語学』 5(3): 81-84